巻　頭　言

別府大学日本語教育研究センター長

松　田　美　香

別府大学日本語教育研究センターは2009年４月に設立され、今年で15年目を迎えます。研究のための『別府大学日本語教育研究』も本号で第14号となります。

本年度５月８日から、新型コロナウィルスは５類感染症扱いとなりました。やっとコロナ禍が明けました。第２次オリエンテーションは、５月２日に国東半島、10月30日に玖珠町・湯布院町へ行きました。10月の玖珠町では、「鉄道ミュージアム」でJRの列車や身近な建物などを「プラ板」で作成する体験をしました。故国へのお土産にした留学生もいたようです。また、「日本語プレゼンテーション成果発表会」の第２回目を７月24日、「朗読コンテスト」を１月16日に実施し、それぞれ優秀者を表彰しました。これらをすべて対面で行えるようになったこと、次第にマスク姿が減ってきた（まだまだ学生たちはマスクをしていますが）ことを心より嬉しく思います。

ただ、さまざまな事情から在籍者数の減少傾向が続いていることが心配です。対面授業の良さは「ライバルの存在」です。ある程度の人数がいるからこそ、やる気も出てくるというもの。学生数が多すぎるクラスは語学にとって致命傷となりますが、ほどほどの人数は確保するよう、努力が求められる今日この頃です。

さて、今回も本紀要には、学外１名、学内１名の計２名の先生方からの御寄稿が掲載されています。御研究への情熱に敬意を表しますとともに、本紀要に御寄稿いただけましたことにお礼申し上げます。いまだ世界のあちこちで戦争が続いています。また、異常気候による天災も頻繁に起きています。その程度も今までの常識を覆すほどのものが増えています。そのような中ではありますが、いかなる留学生に対しても、学びたい気持ちに応え、平和な世界を作るための尽力を惜しまず、日本語教育に邁進していく所存です。

最後に、本号の刊行にあたってさまざまな形で御支援をいただいた方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

令和６年３月31日